

日本人学生の中国の見方

—— 間接的経験のあり方をめぐって ——

Japanese Students' Views on China

盧 濤
Lu Tao

要 約

本文根据近些年在汉语课堂搜集到的材料，考察日本大学生对中国的间接体验及其认识的实际情况，提出今后加深中国认识所应解决的迫切问题及其可能性。本文由1)“知识中的中国”；2)“文艺作品中的中国”；3)“新闻媒体中的中国”；4)“中国外的中国”四部分组成。我们的结论是，1)日本大学生对中国的理解仍停留在表面的和局部的认识水平上，克服表面认识所带来的问题是今后包括中国理解在内的跨文化教育的中心课题；2)知识水平上的中国认识能力有一定的弱化倾向，而来自所谓直接经验的中国认识亦有失偏颇；3)更多地引导文学艺术作品的阅读与欣赏是提高中国认识的重要手段；4)克服新闻媒体的误导是纠正对中国错误认识的关键之所在；5)日本或其他国家日常生活中的中国文化体验亦有助于对中国的理解，但不能将这种“本土化”了的中国文化与大陆的中国文化等同起来。

关键词：间接经验，中国认识，知识，文艺作品，新闻媒体，中国外的中国

人类若想得救，我们就必须集中注意我们的相同之处，我们和一切别人的共同点。

我们必须尽一切办法避免扩大差异。

—— J. L. Borges. *Twenty-four hours Dialogue with Borges*¹⁾.

1. はじめに

日本の大学で中国語を教え始めてから、かれこれ十数年経っている。その間、受講者と意思疎通を図りながらスムーズに授業を展開するためには、授業アンケートを取ったり、「私の中国体験記」という題で作文を書いてもらったりした。学生諸君が自分たちの持つ中国イメージや、間接的、直接的な中国体験の感想を素直に述べてくれた。当然のことながら、そのほとんどは、日本の中の中国という間接的な経験である。それにしても、その間接的な経験の中には、日本人学生の中に形成されている中国像いわば中国認識のあり方を把握するヒントが多くある。本稿は、日本人学生が自由記述の形で教えてくれたその間接的な経験から得られた中国認識の一端を描きながら、日

本人学生がどのようなルートを通して、どのように中国を見ているかを記述分析して、中国理解の問題を提示すると共に、今後の中国理解を含めた異文化教育の方向性や可能性を検討することを目的としている。

日本人学生の報告を見ると、間接的中國体験のルートとしては、たいてい、1) 授業や教科書、2) 文学芸術作品、3) 新聞やテレビ、4) 中華街や在日中国人及び諸外国での体験といった4つに分かれることが分かる。本稿も、その4つに沿って、1)「知識の中の中国」、2)「フィクションの中の中国」、3)「マスコミの中の中国」、4)「中国の外の中国」に分けて、日本人学生が間接的に見てきた中国及び中国理解のあり方を描いてみることにする。²⁾

1) 张隆溪〈非我的神话—西方人眼里的中国〉(Spence《文化类同与文化利用—世界文化总体对话中的中国形象》(北京大学出版社, 1990) 收录)より引用。

2. 知識の中の中国

日本において、「漢学」という学問が成立しているように、古来日本人は中国に対して極めて強

い関心を示し、多領域にわたる多面的な研究を行い、世界でも類を見ない蓄積を残している。そして、その学問的成果から得られた知見、知識は、教育の普及に伴い、庶民一般に浸透して、日本人の基本的な教養となっていた。中国古典に含蓄される哲学や思想、価値観などは、場合によって中国人以上に理解されているとも言える。³⁾ 今まで、義務教育制度の完全実施や、高等学校、大学の高い進学率により、日本人学生はより体系的な教育を受けながら、中国認識、中国理解のための教育も受けてきた。歴史や地理、社会などの授業科目はもちろんのこと、国語の授業においても、漢文・漢詩の単元が設けられているように、中国理解に関連を有する教育が継続的に進められている。地理の授業で覚えてきた揚子江（長江）や黄河、万里の長城、歴史の舞台上に登場してくる中国英雄の群像、社会の授業で知らされた一人っ子政策、そしてまた国語の授業で理解している「子曰く」の孔孟思想など、いずれも中国に対する間接的体験になり、中国社会への追体験となるのである。日本人学生の中国理解の源泉は多くがこのような教育に求められるのである。

毎年実施される大学入試センター試験「国語」には必ず「漢文」の試験が課されるように、漢語、漢文は日本語の一部として位置づけられる。漢字語はもちろんのこと、中国古典の故事成語や名言名句も、日常の日本語として使われている。漢文、漢語の学習を通じて、日本人学生は、中国に対する理解を深め、中国のイメージをも形成していくはずである。李白の「早発白帝城」、杜甫の「春望」、白居易の「長恨歌」は、若い学生を含めた多くの日本人に楽しめる。⁴⁾ NHKのテレビ番組「漢詩紀行」やカルチャーア

2) 日本語において、「児童」、「生徒」、「学生」は、それぞれ小学校、中等学校（中学校・高等学校）、大学で教育を受ける者を指し示している（『広辞苑』）。本稿もその使い分け方に従って、「学生」とは大学生のことを意味する。

3) 加藤（2004）が、日本人の「漢文力」について、「漢文の本家は中国ですが、二十世紀初頭までの近代に限ってみれば、『科挙』（官吏登用試験）の受験勉強に呪縛されていた中国人よりも、漢文を純粋な教養として学んでいた日本人のほうが『漢文力』をもっていた、と言えるかもしれません」と述べている（p.8）。知識人に関しては加藤氏の指摘のとおりだが、識字率の割合や書籍流通の事情などからして、庶民のレベルにおいても、日本人がより漢籍に接触する機会が多かったとも言えよう。

ワー「漢詩への誘い」などがそれなりの視聴率を保っていたのも、漢文学の普及、浸透を物語っている。漢詩や漢文が日本人学生の中の中国像を形作る上で大きなインパクトを与えており、中国に親近感を覚えさせてきた。大学に入学し、中国語を第二外国語に選択する、或いは中国語を専門とする学生の多くは、漢詩、漢文に魅せられたからだという。「私の名前の『紗』は、中国の美しい布からきたと父から聞いた⁵⁾」と愛着を持って報告してくれる日本人学生を目の当たりにすると、ある意味では、中国の伝統文化は血肉と化され、日本人のアイデンティティの確立に多かれ少なかれ影響を及ぼしていることを思い知らされる。

中国の古代史や、古典思想、古典文学に大いなる関心を寄せる日本人学生も少なくない。史書「史記」、「三国志」、「十八史略」などを愛読する学生にとっては、春秋戦国の遊説家、劉邦と項羽、三国時代の劉備、曹操、諸葛孔明がヒーロー、または憧れの的となっている。そして、「封神演義」、「水滸伝」、「西遊記」を楽しむ一方、老荘思想や孫子兵法の妙味を味わっている。諸葛孔明の「亮」を取って名前を付けられたことを誇らしげに告げる学生もいるほどである。教科書のなかで触れた中国歴史の深み、重みは、日本人学生に中国に対する尊敬の気持ちを容易に持たせてくる。「高校で日本史や世界史を勉強するとき、中国は常にその存在感を意識させる国でした。中国なくしてはどこの歴史も語れないと言えらると思いました。」というような記述はよく目にするものである。

ところで、最近、このような「知識の中の中国」への理解が困難になりつつあるように思われる。理由の1つとしては、マスメディアなどの影響による日本人学生の読書離れや、漢字能力、漢文能力を含めた国語能力低下の問題が挙げられる。その問題により、漢籍に接触する機会が減り、中国古典を読み解く力が弱まるのが十分予想され、知識の中の中国を理解するルートが遮断されるのではないかという危惧さえある。日本人

4) 1983年筆者が初めて日本を訪れた時、高校の国語授業を見学した。ちょうど「長恨歌」の授業だった。中国語で詠んで聞かせた「長恨歌」に示した高校生たちの興奮、驚喜の反応は今も忘れられない。

5) 学生たちの気持ちや感じ方を尊重する趣旨から、本稿では日本語表現をそのまま引用していることをことわっておく。

学生に対する中国理解の教育の課題として、この問題に留意すべきであろう。⁶⁾

それに加え、もう1つの問題は、語学の現地学習経験を重視する風潮と同様に、中国での直接的体験を強調するあまり、歴史や文化に対する深層的認識を深める知識を否定するような意見が蔓延していることである。

「中国のイメージは現代的なものよりも古代の文学なり文化なりに固まっています」と学生が自己認識、自己分析をしているように、知識の中の中国への認識には偏りがあるのも事実である。本を読む能力に優れる人が必ずしも現実の意味を理解する能力に優れるに限らないのと同様に、知識の中の中国を理解している人が現実の中国をよく理解できるとは限らない。習得した中国に関する知識をひとり歩きさせ、そしてその知識に振り回されるようになっていくことも考えられる。実際、「私のように中国古典の研究者には、中国に対して一種の幻想めいた憧れを抱くものが多く、性懲りもせず現代の中国に古典中国の残像を探し求めようとする。その結果、交通ルールの無視や、店員の粗野な対応に接するたびに、ああ、こんなはずじゃなかった、と落ち込んでしまう」というように、中国の現実に遭遇し、失望した古典の研究者もいるらしい。⁷⁾ただし、現代中国と古典中国との間に存在する「乖離」は、古典中国の理解を放棄することを意味しては決していない。むしろ、古典中国から現実の中国に対する解釈を求めるべきではあるまいか。歴史は切断するはずがないものなのである。個別の直接的中国体験は、部分的には事実だろうが、しかし必ずしも全体の真実ではあるまい。どういう事情、状態、因果関係にあるかを確定しなければならない事実問題がそこにあるはずである。中国の現実に嗅いた当の学者が本当に古典中国を理解しているのかも疑問である。

上のような学者の嘆きとあいまって、恰も中国の暗部しか「直接的体験」できないというような

記述も散見する。「すべての人に開放されるべきだとする建前があるにもかかわらず、実際には特定の間人からの紹介状がないと本を貸さない公共図書館。顔見知りには「どうぞ、どうぞ」を愛想よく対応するものの、見知らぬ客は明らかに無視する国営食堂のウエイトレス。バスの到着や郵便物の受付を待つのに、決して列を作らない人々。路頭で売っているリンゴを買おうと思って眺めていると、「やめろ、君からぼったくろうとしている」と進言してくれる友人。道路に初殻を撒き散らし、われわれの乗ったバスに脱殻してもらおうと「早く通れ」とせかす農民。「食べ終わったら早く捨てろよ」と言って、食べ終わった弁当の発泡スチロール容器を車窓から捨てる旅の道連れ。その一つひとつの存在が、筆者を悩ませ、戸惑わせた。そして、みずからの苦悩を癒すために、中国人の行動原理を説明する文章を書こうと思った⁸⁾。研究者の苦悩を癒すのが学問的実践の動機づけのようだが、苦悩の種を連ね並べ、誇張するあまり、「楽しみ」の現実を見過ごして客観性に欠ける論考を進める危険性もあるかも知れない。個別の経験に拘らず、中国伝統文化の理解の意義を考え直すべきという意見に耳を傾けるべきであろう。「今留学から帰った人達が不満不平を並べるのを聞くのは耐え難い。欠点ばかり見てきて何の留学かと言いたいが、世の中の風潮である。若い人が憧れや惚れ込むものを持たないで留学は成立するものではない。中国をもっと長いスパンで見たいと思う。伝統文化が視野に入った時初めて中国は輝き始めるのではないか。」⁹⁾

事実、日本人学生の中国体験報告には、上に引用した学者たちの経験とまったく逆の印象を与えるものもある。「私は学生時代に一人で中国を旅行したことがある。そのときにさまざまな人と話をした。あるところでは偶然知り合っただけで家に招待してもらい、いまでも手紙のやりとりがある。(中略)。この人は天津に住んでいる女性で、移動する手段を尋ねたところ、たまたまその時間は既にバスがないと告げられ、私は途方に暮れた。彼女はついてきなさい、と言い仕事帰りの自

6) 読書離れや文章力の低下にふれ、加藤(2004)が「百年後の史家は、「平成」をふりかえり、「言葉が失われた時代」と定義するかもしれません。」と指摘している(p.13)。なお、日本人学生の漢字運用能力の低下については、盧濤(2004b)を参照されたい。

7) 古森義久「日中再考」(産経新聞社、2001)p.16を参照。

8) 園田茂人「中国人の心理と行動」(NHKBOOKS、2001)p.31を参照。

9) 大河内康憲「私の中国語学習」(同学社「トンシュエ」第2号(1991))を参照。

転車を押しながら私を家へと案内した。当時現在よりはるかに言語レベルの低かった私はあまり状況が飲み込めず、とぼとぼ彼女の後を疑心暗鬼になりつつ行って行った。家では炒め物やラーメンなどをいただき、ありがたかった。その日は近くの中国人しか泊まれない『招待所』を紹介され、彼女は翌日の5時に迎えに来ると言い残して去っていった。不安を抱きつつも流れに身を任せていたが、彼女は時間どおりに迎えに来て、しかも外に天津港行きのバスまで待たせてくれていた。私はありがとうとしか言えず、バスの中で泣いた。どうして見ず知らずの人にここまでできるのだろうと。このことが、人生最初の大きく、そして私の未来を決定付けたとも言える異文化体験である。」

フランスの歴史家アラン・コルバン氏が、歴史への関心が失われている理由を説明して、こう述べている。「世の中が現在中心主義になってしまったからだ。社会の変化が速くなり、新しい情報があふれているために常にいまの出来事に目を奪われている。現代人は過去や未来に目を向ける余裕を失って、現在に自己陶酔的に執着しているように見える。」¹⁰⁾ 個人的経験をベースにして今の中国社会を見てしまうのは、正にアラン・コルバン氏が指摘した「現在中心主義」的手法であり、「現在に自己陶酔的に執着」した結果そのものと言えよう。哲学者の谷川徹三の言葉が思い出される。「学問は満足しようとしな。しかし、経験は満足しようとする。これが経験の危険である。」個別の経験は場合によって、偏った結論になってしまう可能性が高い。実際、後述するように、マスコミの報道に誘導され、形成された中国認識には、その個別の取材によって作り上げられたものもある。歴史や文化は代々に蓄積され継承されるはずのものであり、それらへの不断の探求、学習が必要不可欠であろう。

3. フィクションの中の中国

歴史や伝統文化と同様、文学芸術作品も異文化理解のために重要な役割を果たすものである。しかしながら、情報化社会に生まれ育った日本人学生たちは、マスメディアから大いに影響を受け、

文学芸術作品、特に中国人の手によるものに触れる機会がかなり少ないようである。

アメリカ人作家パールバックの「大地」や、近年紹介された在英、在米中国人による「ワイルド・スワン」や「上海の長い夜」などを読んでいる日本人学生もいるが、極僅かである。魯迅をはじめとする現代作家の一連の作品は一時日本に多く紹介されていた。魯迅研究から現代中国文学の研究をスタートした日本人研究者も多かったし、国語の教科書にも魯迅の「故郷」などが採用されていた。しかしいつの間にか、国語の教科書から魯迅の作品が姿を消し、魯迅の名前すら知らない高校生もいるという。

中国文学作品を読む代わりに、中国を舞台とする日本人の作品を読んで、中国を理解しようとする傾向が見られる。日本人作家が解釈を試みた中国への擬似体験のようなものである。それは、古めかしい中島敦の「李陵」や吉川英治の「三国志」や井上靖の「敦煌」、或いは今の人気作家である酒見賢一や高村薫（例えば「李歐」）である。

映画に関しても同じことが言える。ブルース・リー、ジャッキー・チェンなどのカンフー映画や、「ヒーロー」、「ラバーズ」のようなアクション映画、張国栄、梁朝偉などの香港、台湾映画に人気が集まっている。「中国語をやって、ジャッキー・チェンの映画を字幕なしで見たい」という中国語授業への要望に示すように、ポピュラーカルチャーまたはエンターテインメントとしての映画が主流となっている。毛沢東や周恩来よりも、日本人学生たちは、ブルース・リーやジャッキー・チェンから、中国認識の拠り所を求めようとするのである。そもそも映画スターが学生の中のヒーローになっているのかも知れない。小説と同じように、中国を舞台とする日本の映画作品やテレビドラマを学生たちは楽しんでいる。山崎豊子の小説がドラマ化された「大地の子」がその典型である。残留孤児を育てる中国人の父親の人間像が多くの日本人学生に感動を与えており、日本人学生もそのドラマから中国の時代背景を捉えようとする。

近年、中国大陸の映画は日本に紹介され、徐々に見られるようになっていく。陳凱歌監督の「霸王別姫」や、張芸謀監督の「赤い高粱」、「初恋の来た道」など、いわゆる純文学のような映画を見

10) 『朝日新聞』2005年11月24日朝刊を参照。

せると、日本人学生はそこに見られる中国を感じたりして、理解を深めようとする。そして、人間の普遍的な感情の共鳴を覚えてくる。中国の映画を鑑賞し、感情移入して自分を省みるに至ったケースもしばしば見られる。張芸謀監督の「初恋の来た道」の感想の一節を紹介しておこう。

「日本映画では表現できない恋愛物語だったと思います。現代の日本とは国も時代も全く違う背景設定なのに、すごく共感できる場面が多くありました。私たちが今してる恋愛は、出会いが人工的なものだったり、ゲーム感覚だったりすることも多いです。だからこの映画で、純粋な“恋”ということを見せられた感じがして、とても新鮮でした。(中略)音楽のせいで時々泣きそうになりました。とても素敵な映画に出会えて幸せです。」

今後、いかにして小説や映画を紹介し、中国理解の教育に導入するかが、フィクションの中の中国ひいて中国認識に繋げる重要な課題として残っている。

4. マスコミの中の中国

10年ほど前の調査によると、親近感を覚える国は、1位はアメリカ合衆国で、2位は中国であった。そして、アメリカ合衆国の場合は、「日本との緊密なつながり」がその最大の理由となっているが、中国になると、「歴史」が最大理由となっている。ただし、親近感を感じる国の判断材料としては、中国の場合も、2,3位の情報源である書籍と授業を凌ぎ、テレビが第1の情報源となっているという。¹¹⁾これは、テレビなどのマスメディアが日本人学生の中国に対する見方を左右する事実を物語っている。

恐らくジャイアントパンダが日本のマスコミに登場したことが、「マスコミの中の中国」を形作る、最初のもっとも象徴的な「事件」であろう。テレビ映像の中に映っている中国は、上で見た知識の中の中国やフィクションの中の中国よりも、日本人学生にとって最も身近な「真実」として受けとめられている。日本人と会話を交わすと、あたかも中国でどこでも誰でも「老酒」を飲んでいるかのように、しばしば「老酒」をスモールトークの話題にされる。しかしいざ現場に入り込む

と、「『中国＝烏龍茶』というイメージがあったのですが、実際は緑茶ばかりでした」という期待はずれの意外な中国体験に示されるように、烏龍茶のような商用コマースさえイメージ作りはかなりインパクトを与えている。次の記述が商用コマースの影響を如実に物語っている。「特に目立った中国経験はありませんが、中国的なもので一番印象にあるのはウーロン茶のCMです。いろんなウーロン茶のCMがありますが、一番好きなのはサントリーのウーロン茶のCMです。中国人の女の人が歌う中国語での歌やふんわりした感じが好きです」。そして、マスコミに現われてくる中国を見ると、日本人学生は、中国人に対する一般化、抽象論を行いがちである。「中国の人は漢字をド忘れしたらどうするのでしょうか？(中略)この前何かの番組でやってた気がしたけど、その時の中国人の答えは、“あきらめます”でした。そんなのでいいのか中国人！適当すぎるぞ中国人！」という記述のように、テレビに映っている個別の事例によって、中国人は大雑把という結論をつけようとする。また、テレビに映っている画面が脳裏に刻まれ、自転車で通勤する繁華街の風景をたよりに、中国を「自転車大国」、「自転車王国」と見てしまい、北京や上海のメインストリートが、バスや車で溢れている場面や、辺鄙な山村では今もなお自転車が珍しいという現実を見忘れてしまう。

さらに注意を喚起すべきは、マスコミの報道によって、中国に対する愛憎の感情が変わってしまうことである。岡田(2002)の報告によると、中国との関係の問題に関しては、異なる新聞を読む学生が、異なる立場とスタンスを取って、異なる態度、反応を示している(下表を参照)。

	中国がすぎ	侵略の謝罪が十分	教科書問題は内政干渉
朝日新聞読者	19.40%	19.40%	11.10%
産経新聞読者	9.50%	42.10%	31.60%

「反日デモ」の報道を見ると、「私にはどうも中国には激情型の方が多いように感じられます」。さらに、「最近の反日運動などを目にする、留学したい気持ちは薄れてきました。デモの映像な

11) 北海道大学言語文化部編(1995) p.22, p.24を参照。

どを見ると反射的に中国に対して嫌悪感がわいたりもします。中国語を学ぶのも嫌になりかけました。」と学生が嫌中の心情が変わっていく。しかし、4,5年前入学した学生の自由記述には次のようなくだりがある。中国語に対する態度はきわめて対照的である。「中国語は大変美しいと思います。もし『人生は美しいものに会うための旅』であるとするならば、この出会いに背を向けることがどうしてできましょう。この機会を逃げたならば、僕は一生後悔し続けることでしょう。』¹²⁾

反日デモを報道するというタスクを抱えている記者が一種の「タスク・フォース」になって中国へ行き、中国を映してくる。当然のことながら、テレビカメラはレポーターの関心がわくところにしか向けられない。結局、中国全土で反日の波がうねり、在中日本人が飲み込まれるかのような危機感を与えてしまう。しかし、SARSで引き上げた日本人がいても、反日デモで引き上げた日本人はいなかったようである。親からの「大丈夫?」という国際電話に、留学中の日本人学生が何かと驚いたという。

岡田(2002)によると、中国に関するプラスイメージを表す上位5つの項目としては、1) 歴史や文化が素晴らしい、2) 食べ物が美味しい、3) 自然が美しい、4) 古典が好き、5) 経済発展が順調に上がっている、があがっている。他方、マイナスイメージの項目としては、1) 大国意識がある、2) 昔の戦争のことを言い過ぎる、3) 民主化が立ち遅れている、4) 環境破壊が進んでいる、5) 生活が貧しい、となっている。プラスイメージは上で議論した「知識の中の中国」によって醸成されたものとしたら、マイナスイメージの形成は、その項目から見ても分かるように、明らかにマスコミによるものである。「現代中国との関わりが比較的少ない項目に支持が集まっている」という岡田氏の指摘のとおり、

12) これを記した、平成12年に入学した学生の心境の変化の有無を知る由もないが、小浜ほか(1989)のアンケート調査の結果からみて、中国に対する日本人学生の感情の変化がある程度推測がつく。それによると、80年代に起こった「教科書問題」に対する中国側の反発については、「当然の反応だ」、「中国側の立場は理解できる」と応える学生は、あわせて80%にも達しており、2005年の暮れに公表された「中国が嫌い」な日本人が6,7割という数字(『朝日新聞』)とは対照的である。

日本人学生にとって、中国はまだまだ時空とも「彼方の国」と同時に、マスメディアも、中国を「此方の国」として映し出していない。「ごくごく一般の現代の中国の方の生活ぶり等は、いまいち見えてこないんですよね」、「中国に対していろいろな間違った先入観ももっているの、本当の中国の姿を知りたいです」という中国語受講者の要望に見られるように、マスコミなどによる中国に対する先入観の存在を学生自身も意識している。

幸いなことに、マスコミの報道に誘導されつつも、自分の目で確認して判断する日本人学生も徐々に出てきている。「(『人民日報(海外版)』を読んで)日本をはじめ、中国の近隣の国についてもよく書かれていることが分かりました。『中国は思想の統制が行われている』と少し聞いたことがあるので読んでみましたが、そのような内容ではなくて安心しました。」、「中国共産党の機関紙なので、もう少し怪しい、思想統制目的の記事があるのかと思ったらそうでもなかったと思います。」という感想に示すように、日本人学生に対して、実体験を伴った中国の再認識を促すことが誤解や偏見を解消する有力な手がかりになる。

今やネット社会である。「人民日報」には日本語版、「日本経済新聞」、「共同通信」には中国語版が、それぞれ用意されているように、日本人も中国人も本国以外のチャンネルを通して相手国に関する情報を把握でき、多面的な相互認識が可能になりつつある。また、チャットで中国人と日本人が会話したりするというコミュニケーションのスタイルも増えてきている。そういう会話(たとえばface to faceでないとしても)を通して意見が交換され、相互理解が深まることが期待される。それにしても、マスコミの偏りや一面性をどう克服するかが、正しい中国認識(日本認識も)を保持するにもっとも喫緊な課題と言って間違いなからう。¹³⁾

5. 中国の外の中国

中国の外の中国とは、日本と中国以外の諸国の中の中国のことである。

中国の伝統文化や生活風習が日本に伝えられ、日本人の日常生活の一部となっている。日本人学生たちは実生活のレベルにおいても中国を体験す

ることができる。食文化がその典型である。中国語受講者に中国から連想するものを挙げてもらうと、十中八九、ギョウザやチャーハン、ラーメンをはじめとする中華料理を挙げる。中国旅行に出かけ、北京ダックなどの本場の中国料理を楽しむことを、中国語を学習する目的の1つとする学生もいる場合である。

「中国風の服を着た絵を見るとわくわくしてきます」と述べているように、中国の服装文化に魅せられる女子学生も少なくない。中国に対するプラスイメージの形成に影響を与えているものの1つはチャイナドレスである。「チャイナドレスにあう女になりたいです」とか、「チャイナドレスを着て写真撮りたいです」というように、チャイナドレスにかなり愛着を持っている。

一方、中国の伝統遊戯の麻雀や、スポーツの太極拳や少林寺拳法なども、中国に対するポジティブなイメージを醸成する要素となる。麻雀をやると、中国語の数字の数え方や「人和地和天和」の文言を覚えてくる。そして、「(麻雀の)ルールを考え付いた中国人の発想の豊かさと、人生の楽しみ方には、とても感心できる。頭の中で役の作り方を考え、相手の心理を読み取り勝負する。この楽しさは一度覚えられたらやみつきになってしまう。このゲームを生み出した中国人に感謝する!!」(盧濤 2005より引用)というように、中国の伝統文化に尊敬の念が生まれてくる学生もいる。

このような日常生活の中の中国を凝縮している空間としては、日本三大中華街即ち横浜中華街、神戸南京町、長崎新地中華街がある。日本人学生の多くが修学旅行などで中華街を訪れ、孔子廟や関帝廟を目の当たりにして中国の伝統文化を実感する。中国的味を味わい、中国的匂い、中国的色を感じては、今の中国への想像が脳裏に去来す

る。長崎中華街だけでも、冬を彩る風物詩の「ランタンフェスティバル」(元が「春節祭」)、夏の「ペーロン大会」,「精霊流し」,秋の「おくんち」(重陽の節9月9日にちなむ)などがあり、中国の原風景を覗かせる。長崎の中の中国文化に触れ、伝統文化に憧れている学生が中国語を専攻するケースもあったのである。

今日の異文化接触・交流の特徴は、1)その量の飛躍的増大、2)地方への拡散、3)その日常性、4)あつれきの増大と要約されているように、¹⁴⁾日本では、人的交流も盛んである。華僑や新来者(new comer)と呼ばれる在日中国人との付き合いは、日本の中の中国を体験する重要な部分になっている。実際、日本人学生は、自分の先生や知人、両親や姉妹兄弟、祖父母や親類から、中国体験の話を知りたりして、間接的に中国に関する知識を増やす場合も多い。それに加えて、華僑や新来者の子弟をクラスメートに持ったり、留学生、外国人労働者、研究者、外国人花嫁などと隣人として付き合ったりしている。留学生や新来者の子弟たちが学習上に現れる「食欲」とも言えるぐらいの積極性、向上心や、生活上の儉約精神に感心したという報告も少なくない。いうまでもなく、中には、コンフリクトを起こしたり、在日中国人の行動に戸惑ったりする、いわゆる苦い経験をもつ学生もいる。それでも、日本の中の中国を体験することはこれからますます増えていくのであろう。

ところで、ヨーロッパやアメリカへ行って、向こうの食事に厭きたら、中華料理の店に入ると日本人は安堵感を感じるという。これは、日本人が中国文化(食文化)に馴染んでいることを意味する一方、日本と中国以外の地域においても、中国を経験することができると思われてよい。「人煙立つところ華僑あり」と言われるように、三千万人とも言われる華僑、新華僑が世界各地に居住している。海外留学に出かけていく日本人学生が、そこにいる中国人と付き合い、中国を理解していくという事例もある。当然のことながら、日本にいる中国人と同様、第二の社会化のプロセスを経たその中国人であるだけに、それぞれの国の文化の色に染まっているはずであり、中国人として

13) 情報学者の西垣通氏が「日本はマスメディアの影響力がとても強い国で、一種の過剰コピー文化社会だ」と指摘している(『朝日新聞』2006年1月3日)。西垣氏がいう「過剰コピー文化社会」は何も日本に限ることはない。それにしても、国際政治学者の山内昌之氏が指摘しているように、「インターネットやメールなど技術の進歩は、情報伝達スピード競争をもたらし、正確さや厚みよりもむしろ表層だけの『速い情報』の一方向的な伝達に満足する傾向が強い」(『朝日新聞』2005年12月1日)というのが事実であって、マスコミ報道に映っている中国認識に関する断片的な情報や知識の是正の問題が切実で提起されてよい。

14) 北海道大学言語文化部編(1995) p2. を参照。

一般化できない。或いは、特殊な事情、背景をもつ中国人もいるかも知れない。日本人学生が留学中イギリスで経験した中国人「遊学生」の事例がそれを教えてくれる。イギリス留学できるのは、中国におけるごく一部の裕福層の子弟に限られる。日本人留学生の体験談によると、その彼たち彼女たちの一部は自分の意思で海外留学にいったのではなく、親の希望に沿う形のものに過ぎないという。お金の甘んじて、よく外食もするし、夏休みに入ると帰国してしまう。勉強が難しくなると放棄してしまう傾向も見られ、日本または大陸にいる中国人学生の多くが持っている向上心や節約精神に欠け、対照を成しているという。¹⁵⁾

6. おわりに

国際コミュニケーション能力や異文化理解能力を高めることが、日本におけるこれからの高等教育の重要な課題の1つとなっている。¹⁶⁾そして、経済をはじめとする中国と日本の交流活動がますます盛んになっていく一方という情勢の下において、中国人に課される日本理解の課題と同様に、日本人にとっても、いかにして中国を理解していくかが、避けて通れない切実な問題となる。「中学生、高校生の時は外国語として英語のみを学んできたので、イギリス・アメリカといった国々の方が身近な国になっています。私は中国をただの距離的に近い国だけでは終らせたくありません。」という学生の期待に応えなければならないのである。

中国はこれからどんどん変わっていく。それに伴い、日本人学生の中の中国も変化していくであろう。日本人学生が見た中国は、部分的でありながらも、中国の真実そのものであることは否めない。また、日本人学生の中の中国は、中国を捉えることであると同時に、日本を捉えることでもあるという事実も否めない。中国理解の教育に携わる

15) 『人民日報(海外版)』2005年11月17日号に、「加拿大: “中国闊少” 成一景」(カナダ: 「金持ちの坊ちゃん」の風景)という記事が載せられ、日本人学生の観察と合致している。

16) 中央教育審議会答申(平成17年9月5日)『新時代の大学院教育—国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて—』によると、企業からの「人材育成の面での大学・大学院への期待」は、「国際コミュニケーション能力、異文化理解能力を高めること」が11項目の中間の6位を占めていることが分かる。

ものとしては、日本人学生の中の中国像を把握することを自任し、不断の努力を怠ってはなるまい。

参考文献

- 王 屏 (2003) 〈論日本人‘中国観’的歴史変遷〉《日本学刊》2003年第2期(中国社会科学院日本研究所 中華日本学会)(邦訳: 西本志乃 盧 濤共訳(2004)「日本人の“中国観”の歴史の変遷について」『マネジメント研究』第4号(広島大学マネジメント学会))
- 岡田臣弘 (2002) 「日中問題に関する大学生の意識調査」『名古屋商科大学論集』Vol147. No1.
- 加藤 徹 (2004) 『漢文力』中央公論新社
- 小浜正子ほか (1989) 「アンケートにみる現代学生の中国認識—お茶の水女子大学の調査より」『歴史評論』1989年10月号
- 小浜正子ほか (1990) 「天安門事件後の日本学生の中国認識」『中国研究月報』1990年3月号
- 竹内 実 (1992) 『日本人にとっての中国像』岩波書店
- 北海道大学言語文化部編 (1995) 『大学生と異文化接触』北海道大学言語文化部
- 盧 濤 (1992) 「日本はアジアで信頼される国となるために何をなすべきか」『全国青年・学生国際問題論文コンクール入賞者論文集』(外務省・外交協会)
- (1997) 「知識化、国際化と言葉」『鹿児島経大論集』第38巻第2号(鹿児島経済大学)
- (1998) 「四字熟語に見る日本」『南日本新聞』
- (2004a) 「反情報化の考え方—言語コミュニケーション能力向上の視点から—」『情報化社会への招待』(学術図書出版)
- (2004b) 「漢字誤用の分析—総合コミュニケーション能力の育成を目指して—」『広島外国語教育研究』第7号(広島大学情報メディア教育研究センター)
- (2005) 「日本人学生が見た異文化—顕在的文化の認識をめぐって—」宋協毅主編『日本語言文化研究』第二集(大連理工大学出版社)

(2005年11月30日受付)
(2005年12月20日受理)